



Title	日本最北の医科大学からアジア、ヨーロッパ、アフリカへ
Author(s)	神田, 浩路
Citation	目で見えるWHO. 2026, 96, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105789
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本最北の医科大学からアジア、ヨーロッパ、アフリカへ



旭川医科大学医学部社会医学講座講師／
国際交流推進センター副センター長

神田 浩路 (かんだ こうじ)

米国、パナマ、スリランカ、ミャンマーに長期滞在して疫学調査及び国際協力実務に従事。
三重大学、JICA本部、JICA専門家を経て現職。

国際保健に関する活動

旭川医科大学は日本最北に位置する医療系単科大学です。医学部は医学科と看護学科で構成されており、学生は両学科及び大学院生を合わせても1,000人程度の小さな大学です。そのため、全学組織である国際交流推進センターが中心となり、学生や教職員の国際交流活動を支援するとともに、各講座と連携しながら国際保健に関する活動を行っています。

国際保健に関する活動では、本学では長らくJICAの国内研修を担当しており、アフリカ保健人材育成に力を注いできました。2003～2013年は看護学科が中心となり「母子保健」を、2008年からは医学科社会医学講座が中心となり「アフリカ地域 地域保健担当官のための保健行政」を担当しています。とりわけ後者は、西アフリカ英語圏のみを対象として開始したプログラムが、アフリカ英語圏、そしてアフリカ全域へと募集対象者が広がり、2023年までに29か国176

名（オブザーバー参加9名を含む）を受け入れました。研修は7週間にわたり実施し、一般的な公衆衛生から地域保健、学校保健、環境保健、産業衛生まで広くカバーした内容で、研修員は帰国後にそれぞれの現場で実施するアクションプランを作成して帰国し、それぞれの持ち場にて本邦研修で習得した知識技術を駆使して現在も現場の第一線にて活躍を続けています。

また、本学の研修担当教員は、研修員が本邦研修で作成したアクションプランを実施できているかを確認するために、フォローアップ訪問を定期的に行っています。これまで9か国を訪問しており、本原稿が印刷されるころにはさらに2か国が増える予定です。さらに、2024年度は帰国研修員全体のフォローアップとして、JICA北海道（札幌）及びケニア保健省の協力のもと、JICA-AMU Environmental Health Symposium in Kenyaを企画し、ナイバシャにて1泊2日の日程で大気汚染や廃棄物処理、水質汚濁、水銀・鉛中毒など、



写真1 JICA課題別研修(カントリーレポート発表(トーゴ))

アフリカ各国で問題となっている環境保健分野に特化した教育及びフィールド視察を組み込んだプログラムを実施しました。シンポジウムの最後には帰国研修員の行動計画としてJICA-AMU Alumni Strategic Framework 2025-2030を作成し、現在、新たなプログラムの展開を模索しています。

その他、教室単位では、ベトナムにおける口唇口蓋裂医療支援活動への診療隊派遣やウクライナ医療者教育支援など、国際協力で積極的な教員が海外の現場へ赴いての医療支援活動や本学での研修実施を担っています。



写真2 フォローアップ訪問(セネガル)



写真3 環境保健シンポジウム(ケニア)



写真4 学生実習(ボメラニアン医科大学(ポーランド))



写真5 学生実習(ILO本部エントランス(スイス))

特徴、どんなことが学べるか

本学では、国際保健分野を含めた学部生の派遣留学を「留学準備段階」「入門レベルの留学」「専門レベル」の3段階に整理しています。短期留学を経験した学生が更なるキャリアアップ・スキルアップを目指して、卒業後の長期留学に発展させるというのが、派遣留学の全体像です。本学は各段階を拡充させることにより、地域及び国際社会における保健・医療・福祉の向上に貢献する人材の輩出を目指しています。直近3年間は、ドイツやポーランド、アメリカ等の欧米やタイ、インドネシア等のアジアの大学および病院、またWHOやグローバルファンド等の国際機関での研修機会や国内での国際色豊かな医療機関での臨床実習の機会を提供しました。大学入学時点では将来のビジョンを描けなくとも、大学が多様なプログラムを提供することにより、一人でも多くの学生が在学中に国際的な視野を持って次世代の医療への貢献

を目指すことができるよう、大きな刺激と学びの機会を与え続けていきたいと思っています。

一方、大学院生に対しては、残念ながら国際保健に特化したプログラムは現在のところありません。そのため、大学院生自らが強い目的意識をもって調査研究を進めることが期待されます。いくつかの講座では国際保健に関連する研究を行っていますので、各教室の研究内容をよく吟味し、自分に合ったフィールドで研究を実施している教室に入ることにより、明確な研究テーマが決まっていなくともおのずと道は開けてきますので、必要であれば遠慮なく相談してください。

若い人へのメッセージ

私自身はアメリカで公衆衛生を勉強していた時に中米ハイチへ赴き、アメリカCDCの専門家とともにリンパ系フィラリア症のフィールド調査を行ったのが国際保健との出会いでした。当時は英語もフランス語も中途半端で周りについていくのが精いっぱいでしたが、フィラリ

ア症患者のQOLを評価した修士論文をまとめたことは現在のアフリカでの活動に大いに役立っています。その後、英語仏語よりもっとわからないスペイン語圏のパナマに長期滞在してHIV/AIDS対策に従事しましたが、幸運にもこれらすべてを20代のうちに経験することができました。

大学院も含めた学生時代の、できるだけ早い段階での”early exposure”は国際保健の世界に飛び込むためには非常に重要なことだと思っています。ルイ・パスツールの有名な言葉に”Le hasard ne favorise que les esprits prepares (Chance favors the prepared mind)”があります。私の博士課程の指導教官は、これを「チャンスは準備した者に微笑む」と訳していました。医療系大学はどの職種も卒業までカリキュラムがびっしり詰まっていますので、なかなか自由な時間を作ることができないかもしれません。しかしながら、それでも敢えて時間を作って外に目を向けて国際保健の世界に飛び込む準備をしてください。そのうちチャンスが向こうから微笑んでやってきますから。